

「下野の刀工 德次郎守勝一派」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



鍛冶場跡

かつて鍛冶屋は、桶屋、ザル籠屋、紺屋同様に町場には必ず存在した。人々の日常生活と強く結びつく品物を作るところから需要の多い町場に存在したのである。しかしながら、鍛冶屋といつてもそれは鍬や鎌等を作る野鍛冶のことであり、刀鍛冶、いわゆる刀工の場合は、そうやたらに存在したわけではない。栃木県の場合、歴史に名を残した刀工二派は鹿沼の細川一派と、徳次郎の守勝一派である。

「徳次郎」ともいわれたように市内徳次郎において作刀に励んだ刀工一派である。現存する作品から判断して、守勝一派には室町時代から江戸時代初期にかけて守勝をはじめ、広勝、重勝、宗勝を名乗る刀工が数代続いているが、作柄からみて一派の頭領が守勝を名乗ったと思われる。

中でも守勝は、相州相模国（現神奈川県）の刀工に師事したといわれ、彼の作る刀は、「相州伝」とも呼ばれ、出来栄えが鎌倉時代相模国で活躍し、相州伝を確立した名刀工正宗に迫ることから「徳次郎正宗」とも称された。また、守勝は、徳次郎鍛冶を代表する刀工であったことから「徳次郎守勝」ともいわれた。

現在、守勝一派の作品は、栃木県内にも残され、そのうち四点が栃木県指定文化財になっている。内訳は守勝銘が刀四点・脇差四点・槍一点の合計九点、宗勝銘が太刀一点・脇差一点・短刀一点である。我が国では

ところで、なぜ、この場所に鍛冶場が設けられたのであるか。刀の材料は玉鋼であり、その原料は砂鉄である。我が国では



守勝神社跡の碑

この場所に鍛冶場が設けられたのである。刀の材料は玉鋼であり、その原料は砂鉄である。我が国では玉鋼を作り出す方法として、明治初期まで粘土製の炉で松炭を用いて行うたら製鉄法が用いられた。したがって作刀には、砂鉄や粘土、松の木等が得やすいことが条件である。鍛冶場があつたとされる所は、半蔵山麓にあるとともに田川にも近い。田川から砂鉄を、半蔵山中からは粘土や勝銘のも勝広銘のもの数点を収蔵している。中でも佐野市唐沢山神社所蔵の県指定脇差は、室町時代末期の守勝の作で、黒ずんだ地鐵の色や板目模様の鍛え肌・瓦の目乱れの刃紋・刀身に施した彫刻は、徳次郎鍛冶独特の相州伝を示しており守勝の典型的な作品であり優品である。

徳次郎の上町、半蔵山の麓に守勝一派の鍛冶跡といわれ所がある。日光宇都宮道路と並行して走る道路の西側の畑である。耕地整理が行われる前は、畑一面に赤褐色の鉱滓がちらばっていたという。

昭和五十五年、鍛冶場跡の近くにある守勝神社が地元の刀剣愛好家等により立派に修復された。徳次郎守勝一派は、今なお徳次郎の住民の心に生きている。

玉鋼を作り出す方法として、明治初期まで粘土製の炉で松炭を用いて行うたら製鉄法が用いられた。したがって作刀には、砂鉄や粘土、松の木等が得やすいことが条件である。鍛冶場があつたとされる所は、半蔵山麓にあるとともに田川にも近い。田川から砂鉄を、半蔵山中からは粘土や勝銘のも勝広銘のもの数点を収蔵している。中でも佐野市唐沢山神社所蔵の県指定脇差は、室町時代末期の守勝の作で、黒ずんだ地鐵の色や板目模様の鍛え肌・瓦の目乱れの刃紋・刀身に施した彫刻は、徳次郎鍛冶独特の相州伝を示しており守勝の典型的な作品であり優品である。

徳次郎の上町、半蔵山の麓に守勝一派の鍛冶跡といわれ所がある。日光宇都宮道路と並行して走る道路の西側の畑である。耕地整理が行われる前は、畑一面に赤褐色の鉱滓がちらばっていたという。

昭和五十五年、鍛冶場跡の近くにある守勝神社が地元の刀剣愛好家等により立派に修復された。徳次郎守勝一派は、今なお徳次郎の住民の心に生きている。